

「家族」と「故郷」

呉 毓華 (浙江工商大学日本語文化学院教員(助手)) WU Yuhua

「お帰りなさい」、横浜駅まで迎えに来た「お父さん」は私の荷物をトランクに入れながら言った。「ああ! たいま、突然のことに一瞬頭の中がカラになった私は、車に乗りこんでからそう返した。「もう一年半近く会えなかったとは思えないね。吴さんは横浜の人で、暫く外国へ行って、帰ってきたという気がするね。だから、“いらっしやい”より“お帰りなさい”のほうがいいかな。」お父さんは運転しながら、そう説明してくれた。

実はお父さんは以前住んだアパートの大家さんである。日本語の第二人称代名詞は複雑で、外国人にとってはとても使いにくい。お父さんは70代だが、まだ毎日東京に通い会社を経営している。お父さんを「あなた様」と呼ぶのはなんか変で、苗字で呼ぶのもなんとなく距離感を感じるから嫌だ。「お爺さん」も年を感じさせるから嫌なので、残りは「お父さん」しかない。

外国語を使う時、意味が分かって、感情が入らない場合がある。例えば、「I love you」や「吴さんのことが好きだよ」で告白されたら嬉しいけど、いったい相手がどんな気持ちで言っているのかがあまり実感できない。逆に母国語で言われると、なんとなく想像できる。最初に「お父さん」と呼ぶ時もそんな気持ちだった。ただ一つの呼び方だと思っていた。それで、大家さんの奥さんのことを「奥さん」と呼んだ。

お父さんと奥さんは本当にいい人である。実は友達の紹介で部屋を借りに行った時は、まだ横浜国立大学の学生寮に住んでいたが、お父さんは部屋を半年程空けたまま待ってくれ、入居後、足りない家具と電気製品は全部リサイクル屋で買ってくれた。私がまだ古い小型のテレビを使っていることが分かった翌日、お父さんはリサイクル屋でちょっと壊れた29インチの2002年製のテレビを買ってきて、自分で修理してから私にくれた。美味しい店があれば、お父さんはいつも「日本の味を味わいなさい」と奥さんと私を食事に連れて行ってくれたものだった。

またある時は、生活用品だけではなく、お父さんは色々な専門書を買ってくれたり、古本屋で120冊の日本文学全集を買い、古びた本に全部白い紙でカバーを作ってくれたりした。私が茶道を習いたいと言ったら、お茶の先生を紹介してくれて、毎週先生の家まで通えるようになった。お父さんはいくつもの店でお茶の道具について色々教えてくれ、私が帰国してもお茶の稽古が続けられるように、お風炉、お釜、茶碗などの道具まで揃えてくれたのだった。

とうとう帰国の日が来た。出発は早朝5時だったが、お父さんと奥さんは4時半にはもう起きていた。3月の末なので周りはまだ暗い。最後の一ヶ月、私はいろいろな人のお別れ会や、荷物の整理などで忙しく、もうすぐ日本を離れると分かっている、悲しんでいる時間はなかった。最後の荷物もとうとうタクシーに積んで、最後に一目、二年半住んだアパートを見ようとした時、突然胸が熱くなって、涙がぼろぼろこぼれてきた。奥さんは私をしっかりと抱きしめ、泣きそうな声で「吴さん、帰ってから、仕事をちゃんとしてね」と言った。「吴さんに、さようならなどは言いたくない。吴さんはただ暫く中国にお嫁にいくみたいだけだよ、いつでも帰ってきてね。待っているからね」とお父さんは私のそばでこにこしながらそう言った。私は「お父さん、いろいろ本当にありがとうございます」と深くお辞儀をしながら言った。その瞬間、「お父さん」はもうただの呼び方ではなく、心の底からこの人は私の本当の「お父さん」であることを実感した。

『広辞苑』の「家族」という単語に「夫婦の配偶関係や親子・兄弟などの血縁関係によって結ばれた親族関係を基礎にして成立する小集団」とある。しかし、私はお父さんと奥さんに接して、お互いに心を開き、気持ちを通わせれば、すぐ「家族」になれることがわかってきた。同じように、生まれたところだけが「故郷」ではなく、「家族」がいっぱいいれば、そこが「故郷」になる。だから、「お父さん」と「奥さん」はもう既に私の第二の「家族」で、横浜は第二の「故郷」になる。

先日「恩返し」という単語を中国の学生に教えた。日本にいた間、私はいろいろな日本の方々から優しくされて、感動したことがたくさんある。私はその感動を中国の学生に伝え、日本文化や文学を正直に紹介し、日本を正しく理解してもらえるように頑張りたい。それに、中国で出会った日本の方々に優しくしたい。彼らも中国を第二の故郷と思ってくれるように尽力したい。時々それも「恩返し」の一つの形ではないだろうかと思う。

今回は神奈川大学COEの招待で来日することができ、もう一度私の第二の「故郷」に戻って、私の「家族」と会えた。また、今回は福田アジオ先生をはじめCOEの方々いろいろなとお世話になった。私の横浜の「家族」はどんどん増えていく。これからも増える一方だろうか。

(呉毓華氏は2006年10月1日～10月14日まで訪問研究員として来日された。)

* 本稿は日本語で執筆されたものを、誌面の都合から編集部で内容を一部割愛したものである。